

PISA型読解力の向上をめざした実践研究

—新聞記事の読み比べ（国語科）を通して—

松川利広

(奈良教育大学国語教育講座)

松本 哲

(奈良県山辺郡山添村立やまぞえ小学校)

新子慶行

(奈良県山辺郡山添村立やまぞえ小学校)

Practical Research for Promoting Literacy of Reading.

Toshihiro MATSUKAWA

(Department of Japanese Language Education, Nara University of Education)

Satoshi MATSUMOTO

(Yamazoe Elementary School)

Yoshiyuki ATARASHI

(Yamazoe Elementary School)

要旨：本稿では、伝統的な読解力とOECDの調査による読解力を区別するため、OECDの調査による読解力をPISA型読解力と呼ぶこととする。PISA型読解力では、テキストを理解・解釈・評価することに重点をおいている。今回はPISA型読解力向上のために、国語科の授業において新聞記事の読み比べを行った。身近な説明文である新聞記事は、比較的はっきりとしたフォーマットを持っているため、読み比べによる共通性と差異性を捉えやすい。類似のフォーマットからなる新聞記事を比較することにより、事実の読み取りや検証、評価といったPISA型読解力の向上につながると考えた。新聞記事の内容は、やまぞえ小学校の児童が平和学習の一環として取り組んだ「原爆稲の刈り取り」である。この学習は3社の取材を受け報道された。その中から2社の新聞記事を読み比べ、共通点と相違点を明らかにし、新聞記事の特徴や自分の体験に基づくどちらの新聞がよいかを熟考・評価させた。その結果、自らの立場と論拠を明確にして、客観的・批判的にテキストを捉えようとする能力が身についた。新聞の読み比べは、PISA型読解力の向上につながることが認められた。

キーワード：PISA型読解力 (reading literacy)、国語科教育 (Japanese language education)、読み比べ (comparative reading)

1. PISA型読解力とは何か

PISA調査における「読解力」¹⁾とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」のことである。この「読解力」は、reading literacyの訳語と用いられた。

この定義は、読解力の概念について、文章の解説と理解といった内容を超越、様々な目的のために書かれた情報を理解し、利用し、熟考することを含んだものとなっている。したがって、書かれたテキストから意

味をくみ取るという、読み手の積極的かつ相互作用的な役割が考慮されている。また、私的な用途から公的な用途まで、学校から職場にいたるまで、さらには積極的な市民としての生活から生涯学習の場面にいたるまで、読解力が持つ広い範囲の役割を認識したものになっている。

2. なぜPISA型読解力の向上を目指すのか

上述のように、PISA型読解力とは、テキストを理解・利用・熟考することである。情報化社会と言われ

る今日、児童を取り巻く環境も急激な変化を見せている。日々さまざまなメディアに接する中で、それぞれが受信する情報は、多くの場合、批判的に検証されることなくそのまま取り入れられてしまっているのが実態であるといえる。

児童にとって、自分に降り注ぐ無数の情報をそのまま受け入れ続けることは、望ましいものではない。中には必要のないものや誤ったものなども含まれているからである。それらを取捨選択し、自分にとって必要な情報を的確に読み取ることが、今の児童に必要であると考えられる。また、自らが情報を発信する立場になった場合、より効果的で正確な発信の方法を考えることも必要となる。

PISA型で示されている読解力の重点は、身の周りにあるテキストをいかに理解し、解釈し、評価するかというクリティカル・リーディングにある。2003年に実施されたPISAの学力調査によって、日本の生徒の読解力の低下が浮き彫りとなった。接する情報と適切に向き合う子どもを育てるため、PISA型読解力の向上が必要であると考えられる。

3. 新聞の読み比べとPISA型読解力向上との関係

PISA型読解力は、あらゆる教科学習及び多様な教育活動を通して育成していくことになるが、本研究ではその読解力の骨格、コアを育成するものとして、国語科が妥当だと考え、とりわけ、説明的文章の学びが重要だと考えた。では、テキストとして、どのようなものを学習材として活用すれば有効であろうか。

まず、テキストの表現の仕方に着目させるためには、同種のテキストを複数読み比べることが有効であると考えられる。同種のテキストを比べることにより、より詳細な表現の共通性と差異性に着目させることができるからである。さらに、今回のように表現の特徴の差異性に特化して学ぶ場合、テキストの種類に加えてそのテキストが示す内容も同じである方が目的に沿うであろう。

また、読むテキストの表現方法は、体系化され分類が容易であることが望ましい。表現方法が体系化されていることで、その機能を捉えやすく、筆者の意図の比較がしやすいからである。

上記の条件を満足させる学習材として新聞記事を使用することにした。

新聞記事は現代社会において、年齢、性別、職業等を問わず最もよく読まれる説明的文章の一つである。非常に多くの人々がほぼ毎日目にするものであるため、レイアウトのフォーマットがわかりやすい形で整っている。したがって、表現方法を比較するという活動に適したテキストであると考えられる。

加えて、多くの児童が将来、日常的に読むと考えら

れ、その内容について理解し解釈し評価することは、一市民として生活していく上で大きな意義を持つ。

テキストとしては、本校で平成17年(2005)10月上旬に実施した「原爆稲」の稲刈りについて書かれた新聞記事を使用する。この稲刈りについては、A新聞・B新聞・C新聞の3紙に記事が掲載されており、同内容での読み比べを行うことができる。また、自分たち自身の実体験が述べられているので、児童が興味をもって読むことが予測され、加えて記述の正誤判断ができるため、根拠を持つ批判が可能となり、本稿の目的に沿った授業が展開できると考えられる。上が必要であると考えられる。

4. 新聞記事の読み比べの授業の実際

4. 1. 目標

- ・ 2つの新聞記事を読み比べ、共通点と相違点を見いだすことができる。
- ・ 2つの記事のそれぞれの特徴を考え、文章の読み比べができる。

4. 2. 学習材

本校6年の原爆稲の刈り取りの記事として扱ったのは、A新聞(資料3参照)・B新聞(資料4参照)・C新聞の3紙である。その中から、A新聞とB新聞の2紙の記事を選択した。その2紙を選択した理由を以下に述べる。3紙の記事を比較すると、選択した2紙の記事には「見出し」「リード文」「写真」「キャプション」「本文」という5つ内容が明確に区別できるように示されているが、C新聞記事の場合、リード文が本文に組み込まれている。児童にとって、比較対象が明確な方がよいと考え、A新聞B新聞の2紙の新聞記事を学習材として選択した。

なお、新聞記事は読みやすいように拡大し、まだ学習していない漢字にはルビをふった。

4. 3. 指導計画

授業は、本校6年児童18名を対象に以下のような指導計画を進めた。(平成17年11月、指導者6年担任松本哲)

- 第1時 新聞の紙面構成や特徴を知る。
- 第2時 2つの新聞記事を音読し、意味の分からない言葉を選び、辞書で意味を調べる。
- 第3・4時 2つの新聞記事を「見出し」「リード文」「コラム」「キャプション」という構成事項ごとに読み比べ、記事の表現について共通点と相違点を明らかにする。
- 第5時 「本文」を形式段落ごとに要約し、共通点と相違点を理解する。
- 第6時 新聞の特徴や自分で体験したことをふまえて、どちらの記事が分かりやすいか選択し、その根拠

をまとめる。

第7・8時 2つの新聞を、見出しやリード文などの構成事項ごとに、選んだ記事とその根拠をもとに話し合う。

第9時 2つの新聞記事を総合して、どちらの新聞がよいかを作文に書く。

4. 4. 教師の支援事項

PISA型読解力の向上をめざすのための手だてとして、教師が心がけたことは、次の6点である。

- ①熟考・評価ができやすいように、新聞の特徴を理解させ、判断基準を持たせたこと。
- ②記事を選択する際に、新聞の特徴や自分の体験したことという2つの視点から考えるように指示・助言したこと。
- ③「どうして」という問いを常に自分や友達に投げかけ、意見とその根拠を明らかにするよう支援したこと。
- ④児童どうしの意見交流の場面で、根拠を明らかにした発言や根拠を尋ねる質問をするよう促し、そのような場面が見られた時、その場で賞賛するようにしたこと。
- ⑤意見交流した結果、自分の考えがどのように変わったか、振り返って考えるようにしたこと。
- ⑥相手の意見とその根拠を認め合うことが大切であることを授業場面で意識づけるようにしたこと。

4. 5. 授業の実際

指導計画に沿って、授業の実際を示すことにする。

<第1時>

一人一人の児童に実物の新聞を配付し、それを見ながら、「見出し」「リード文」「本文」「写真」「キャプション」がどの部分を指すのか、マーカーで囲ませながら、新聞の紙面構成について理解させた。新聞会社が違っても、形式は同じであることに多くの児童が興味を抱いた。

その後、「新聞の持つ特徴として、どんなことが挙げられますか。」と発問し、①事実を伝える ②一覧できる ③読みたいときに読める ④保存、記録ができるという4点を確認した。さらに、参考資料²⁾を配付し、新聞記事の書き方の特徴として、読者にいち早くニュースの骨子を伝えるため文章構成が結・起・承・転になっていること、事実を伝えるために5W1Hが不可欠な要素であること、見出しとリード文で概略が分かるように工夫していることを説明した。なお、新聞社の考え方で報道内容に違いがあることも説明した。

<第2時>

はじめに、A新聞の記事とB新聞の記事を音読させた。まだ学習していない漢字にはルビが振ってあるので、ほとんどの児童が正確に読むことができた。次に、各記事の意味の分からない言葉に線を引かせ、文脈の中で意味を予想させた後、辞書で意味調べをさせた。

児童が意味調べをした言葉は次の通りである。

<A新聞>並行、たわわ、未成熟、影響、放射能、収穫、提供、栽培、一見

<B新聞>NPO、収量、採取、同小、生命力、文部省、突然変異、原爆調査団、採取、浦上天主堂

このなかで、NPO、文部省、浦上天主堂、原爆調査団という言葉については、社会科の教科書や資料集などを参考に説明を加えた。この第2時の学習は、文章を利用・熟考するために欠かせない解読を目的として行ったものである。

<第3・4時>

2つの新聞記事を評価するためには、表現の共通点と相違点を共通理解させておく必要があると考えた。そこで、2つの新聞記事を「見出し」「リード文」「コラム」「キャプション」の順に読み比べをさせ、よく似た表現と、どちらかの記事だけに掲載されている表現を一覧表にまとめさせることにした。個人学習の後、全体で話し合い、自分が見つけられなかった表現は、各自一覧表に追加記入させていった。(資料1参照)

<第5時>

本文に書かれていることの共通点と相違点を明らかにすることは、児童にとって容易なことではない。特に、読みの苦手な児童にとっては、どのように読んでいけばよいか分からないまま時間が過ぎてしまう。そこで、以下のような細かな手順を指示し、2つの記事の読み比べをさせた。

①A新聞を5つの形式段落に分ける。

②各段落を要約させ、内容をつかませる。

③A新聞の5つの内容が、B新聞に掲載されているか確認する。

④その結果、2つの新聞に共通して掲載されている内容と独自に掲載されている内容を明らかにする。

ここで比較する内容を明確にしておくことが、以後の熟考・評価の学習において大きな意味を持つ。熟考・評価の論拠を立てる際に、よりどころとなる事実を把握しておく必要があるからである。

<第6時>

各児童に、新聞の特徴や自分で体験したことをふまえてどちらの記事が分かりやすいか選択させその根拠を自由にワークシートに記述させた。(資料2参照)

その結果は、以下の通りである。

表1 新聞構成項目ごとの選択児童数

	A新聞	B新聞
見出し	1	1
リード文	16	16
写真	2	2
キャプション	2	2
本文	11	11

ABどちらかの記事に評価が集まる構成項目が多かったが、どの児童も読み取ったことをもとに自分なりの考えを積み上げ、評価を下している結果となった。以下構成項目を活用して児童は次のような記述を行った。見出し・リード文・写真・キャプションについてはどちらかの新聞に大きく偏る結果となった。記述の内容は、「インタビューの言葉を書いている（B新聞見出し）」「黒地に白抜き文字が目を引き（B新聞見出し）」「5W1Hが書かれているので、様子がよくわかる（A新聞リード文）」「B新聞は人数の誤報があり、事実を正確に伝えられていない（A新聞リード文）」「何人も写っているので、みんなでやっているということがよくわかる（B新聞写真）」「日にちと場所を書いているのでわかりやすい（B新聞キャプション）」などが見られた。

本文については、A新聞11人、新聞7人と人数差が小さくなっている。これは、両新聞に共通しない内容について、各児童それぞれの立場や考え方から記事の重要性を考慮しているからであると考えられる。A新聞には、原爆稲のもみを取り寄せたK氏についての記述があり、B新聞には、原爆稲の由来や栽培を行なったNPOのことについての詳しい記述がある。

<第7・8時>

授業のはじめに、新聞構成項目ごとの選択児童数を提示した。その後、「見出し」「リード文」「コラム」「キャプション」「本文」の順に、選んだ根拠を発言し、質疑応答の時間をとった。その中で、PISA型読解力向上につながったと認められる場面を取り出し、詳述することにする。

はじめに、リード文について行われた話し合いの実態から見ていくことにする。

C1 ほくはB新聞を選びました。なぜなら、だれがどこで、何をしているかを短くまとめてあるからです。
C2 わたしは、短い時間で読みやすいから、B新聞を選びました。

C1の発言は、新聞の特徴に着目した発言であり、C2の発言は、効率性に着目した発言である。このような根拠を明らかにした発言をするに至ったのは、教師が、「発言をする前に、事実だけ言うのではなくて、『どうしてそう考えたか』をきちんと話すことが大切です。そうすることで、相手に自分の考えをよく分かってもらえます。」と発言の仕方やその意義を話し合いの前に全体に話したからであろう。PISA型読解力向上に向けて児童への意識付けは大切な教師の支援であると考えられる。この発言を受け、C3、C4、C5の話し合いが以下のように続いた。

C3 C2は短い時間で読めると言ったけど、短くまとめすぎて内容がよく分からないので、A新聞の方がいいと思います。

C4 B新聞は文字数が少なくまとめられているけれど、それだと、内容が伝わらないし、読んでいる人はなぜそうなのという疑問が生まれてくるので、詳しいA新聞がいいと思います。

C5 私は、B新聞は要約してあるから忙しい人には、内容が簡単にわかっていいと思います。でも、B新聞にはどこでしたかが詳しく分からないのでA新聞の方がいいと思います。

C3、C4はリード文の特性を理解した上で記事を読む人の立場に立ち根拠を述べている。新聞の特徴を学習したことが生きている発言である。C3は「C2は短い時間で読めると言ったけど」と、友達の考えを自分の発言の中に取り入れている。また、C5は「B新聞は忙しい人にとって要約してあることがよい」と自分と違う考えも認めた上で、「でも、B新聞ではどこでしたかが分からないからA新聞がいい」と自分が選んだ新聞の良さを発言している。自分の発言に相手の考えを取り入れている点や相手の考えの良さを認めている点は、PISA型読解力の向上を目指す上で重要なことだと考える。教師は、C5の発言の後「話し合いをするのは、相手の考えを否定するためにするのはないよ。相手の考え方を認めることが大切なことです。」とC5の発言をほめ、全体への意識付けを図っている。また、「ここは自分の考えと同じ。ここは違う理由を言っているなあと違いを見つけながら聞かないといけない。」と、聞く態度についても指導したことが相手の考えと自分の考えを対比しながら考える力を育てることにつながったと考えている。

次に、「本文」についての話し合いの場面を見ていくことにする。「本文」に関しては、A記事を選択した児童とB記事を選択した児童の人数差が少なかったことで、お互いに何を根拠に選んだか興味を持って友達の発言を聞いていた。平和学習の取り組み、NPOについて、原爆稲の由来の説明、食べ比べについては、どちらかの新聞記事にだけ紹介されていた。PISA型読解力の向上をめざした場合、新聞記事に差異が明確であることが、読み比べを活性化することにつながるし、熟考・評価する能力を育てるために有効だと考える。では、実際の授業の様子を見ていくことにする。

はじめに、新聞を選んだ7人の児童が理由を発言した。次に、B新聞を選んだ3人の児童が理由を発言した。

教師は、相手の根拠が分からないときは質問をするよう助言していたので、次のようなC6がC7に対して発言の根拠を明らかにしていこうと尋ね続ける場面

が見られた。

C6 C7さんはインタビューがすごくいいと言っていました、B新聞のどこがいいんですか。

C7 インタビューされている人の内容がすごくいいと思いました。

C6 例えば、どんなことですか。

C7 「60年前からの生命力が受け継がれている」というところがいいと思いました。

C6 どうして、そこがいいと思いましたか。

T そのように、どうしてとたずねていくことが大切ですね。

C7 生命力を辞書で調べると、生き物の生き続けようとする力と書いてありました。被爆した稲が生き続けているということを生命力という言葉で言っているのがすごいなあと思いました。

「どうして」という問い続けることの大切さを教師が自覚し、そしてその必要性を児童に何度も話したことが、このような問い続ける児童の意識につながったと考えられる。自ら出したものであれ、他の児童が出したものであれ、その場に出された意見に対し、常に「どうして」と問いかける姿勢を育てることが、PISA型読解力の育成につながると考えている。

また、この新聞記事は児童自身が体験したことを扱っている。このことに関しては、以下のような話し合いの場面が見られた。

C8 このインタビューに書いてあることは、私が思っていたことだし、それに、そのことを書いてもらって読者の人に自分たちの気持ちを分かってもらえてB新聞がいいと思いました。

C9 それなら、インタビューしたことはA新聞でも書いてあるけれど、なぜ、B新聞を選んだのですか。

C8 B新聞のインタビューには「戦争はこわい」という言葉があるけれど、A新聞のインタビューにはそういう意味の言葉はないと思います。

C10 ぼくも同じで、A新聞は体験した事への思いが簡単に書いてあって、B新聞では、「戦争がこわい」「生命力すごい」という稲刈りをした思いが詳しく書いてあると思います。だから、体験したぼくらの思いがよく分かってもらえると思います。

これらのインタビューの内容についての発言は、まさに体験者にしか言えない発言である。自らの体験が新聞記事になるということはまれであるが、今回のように、そのような機会をタイムリーにとらえ、それを学習材として読み比べの授業を展開したことが、児童の学習意欲の高まりにつながったと思われる。

<第9時>

ディスカッションののち、今までの学習を振り返って「総合的に判断して、ABどちらの新聞を選択するか」という発問をし、選択した記事とその理由を書くという活動を行なった。結果はA新聞を選択した者6人、B新聞を選択した者12人であった。どの児童も、記事を選択した理由が書けていた。新聞の特徴に着目した論拠を述べている者が9人、自分の体験に基づいた論拠を述べている者が14人と、体験を元にした理由付けを行っている児童がやや多かった。また、どちらも書けている者が6人いた。

この結果から、テキストの全体を評価する際に、これまでの学習をもとに、自分の論拠に立脚した判断を下すことができるようになったことが認められる。PISA型読解力における「熟考・評価」の考え方や手順が身に付いていることの現れであると考えられる。

以下に、児童が総合的に判断して書いた作文を載せ、考察を行うことにする。

<E児>

私はAにしました。なぜかと言うと、Aの良い所は、2つあります。どこかと言うと、リード文、キャプションです。リード文の良い所は、くわしく書いてあることです。平和学習から原爆稲のことがあるからです。Bでは、あまり分からないからです。Aは、読みながら想像できます。しかし、Bは文字が少なすぎて、あまり伝わりません。だから私は、Aにしました。その次にキャプションです。キャプションはAでは、被爆した稲と大事な言葉がいろいろ入っているのでAにしました。

この児童は、リード文とキャプションという2つの構成項目を取り上げ、そこから判断を下している。論拠の記述については不十分などところがあるものの、新聞記事というテキストを構成項目ごとに取り出し、それぞれを比較して評価しているという点で、これまでに学習した読み比べの手順が育ってきていることがうかがえる。

<F児>

ぼくは、Bのほうがいいと思います。18人が16人になっているのをかえたほうがいいです。見出しは、N君やYさんのインタビューの答えをそのままのせていると、読んでいる人も見出しの「戦争こわい」「生命力すごい」をみると本文が読みたくなるような書き方なのでいいです。体験しているぼくたちが読者だとすぐに本文を見てしまいそうです。原爆稲の知らない人でも原爆稲のくわしい説明とどこでできたのか書いてあるのでBがいいと思います。

情報の誤りや見出しの表記、本文の記述内容を指摘

し評価をしている意見である。見出しについては、本文への導入であるという位置づけを意識しており、構成項目の役割を踏まえた考え方ができている。また、本文の内容についても、体験したものとしての意見に加え、原爆稲について予備知識のない一般の読者を視野に入れた評価を行っている。新聞のメディアとしての特性を考えに入れた、総合的・包括的な評価の一端が見られる。

<G児>

私はBの新聞の方が良いと思いました。その理由は、大切なことを省略せず、読みやすいようにまとめてあるからです。たとえば、Aの新聞では、「収穫の日を向かえ…」から始まるけれど、Bの新聞は「同村広代に…」など学校を出発から書いてあるAの新聞は、少しじれったいような感じだけどBの新聞は田から始まっているので、本題に入ることができ、とばしたくなるような文はありません。だから、手ごろに読むことができるので良い新聞だと思いました。

あとBの新聞の「コシヒカリと食べ比べへ」など実際には予定されていない文は、誤報なので、直してほしいと思います。

本文の記述について、正確性に加えて、読みやすさという観点から論拠を立て判断を下したものである。情報を正確に、適切に伝えるという新聞の役割を踏まえた意見であり、学習した内容をもとに判断をしている。

さらに、「たとえば」として具体的な記述内容に言及している点に注目したい。自らが下した評価の論拠について、その判断材料となった箇所を例示しているものである。テキストから取り出した情報から評価に行き着くまでの熟考の過程がしっかりとあることがよくわかる。PISA型読解力の重要な要素である、熟考からの評価という流れに沿った意見となっている。

<H児>

私は、Bがいいと思う。それは、本文にとってもくわしい事が書いてあって、たとえばどこで採取されたかなどが書いてあるから。短く省略してあることがいいと思った。こまかいまちがいなどを、もう少し気をつけて書くともっとよくなると思う。見出しの工夫などもしてある（インタビューしたことをのせている）。写真もキャプションも、おたがいに合ったものを書いてあるのでBの方がいいと思う。

Aでは、BにはないKさんへのインタビューや、平和学習のこともかいてあるから、Bには、そういうことを入れたら、取り組んでいることが、見ている人が分かるから、そこらへんをBにもいれたらいいと思う。読者の気持ちになると、Bの方が、私は、見出しや本

文や、キャプションなどのことを見て、Bの方が、体験してきた事を実感できる気がした。

前半は、全体を概観した総合的な意見に加え、具体的な構成項目の評価や構成項目の相互の関わりについて述べている。このように全体と部分の関わりも視野に入れた意見が書けていることは、PISA型読解力の定着が進んでいると認められる。

後半は、本文の記述内容について指摘している。この児童が総合的に判断して選択したのはB新聞であるが、ここではA新聞の良い点を取り上げ、B新聞の改善すべき点について指摘している。このことは、客観的にテキストを比較することで、立場や視点によって評価のあり方が異なるという考え方が身につけていることを示している。PISA型読解力においては、評価の結果ではなく、そこに至るまでの思考の過程を意識化することが重要視されるが、それが定着した事がうかがえる。

また、G児とH児については、普段の読書量との関連も指摘することができる。G児とH児は普段の読書量が豊富であり、語彙や表現などの面で、多くの文章と接していることが影響を与えていると考えられる。PISA型読解力の向上のために、日頃の読書活動の充実も必要だと考える。

5. 成果と課題

以上述べてきたように、新聞記事の読み比べをすることで、個々の児童を見たとき、個人差はあるもののPISA型読解力は向上していると言える。

今回用いた学習材である新聞記事は、テキストとしてのフォーマットを持っているため、読み比べによる共通性と差異性の明確化を図りやすく、PISA型読解力の向上を目的とした本実践の目標を達成するのに適していた。同一フォーマットのテキストを比較することで、正確かつ詳細な事実の読み取りや、根拠を明確にした熟考・評価といったPISA型読解力の向上につながったと考える。また、新聞記事の内容が、自分たちの体験したことについての記事であったことは、PISA型読解力の向上に大きく寄与している。事実の正確な読み取りが行えることに加え、積極的に内容を比較し、体験者の側から「よくわかる新聞はどちらか」を熟考・評価する姿勢につながった。自らの立場と論拠を明確にして、客観的・批判的にテキストを捉えようとする視点が身についたと考えられる。

次に、PISA型読解力を向上させるためには、先に述べた教師の支援事項①～⑥が有効であると検証された。

①熟考・評価ができやすいように、新聞の特徴を理解させ、判断基準を持たせたこと。

- ②記事を選択する際に、新聞の特徴や自分の体験したことという2つの視点から考えるように指示・助言したこと。
- ③「どうして」という問いを常に自分や友達に投げかけ、意見とその根拠を明らかにするよう支援したこと。
- ④児童どうしの意見交流の場面で、根拠を明らかにした発言や根拠を尋ねる質問をするよう促し、そのような場面が見られた時、すぐに賞賛するようにしたこと。
- ⑤意見交流した結果、自分の考えがどのように変わったか、振り返って考えるようにしたこと。
- ⑥相手の意見とその根拠を認め合うことが大切であることを授業場面で意識づけるようにしたこと。

これらの支援と新聞という学習材がうまく適合してPISA型読解力を伸ばすことにつながったと考える。

また、比べ読みをすることで、「～と考えたから」「～と思ったので」「どうしてか」という「この点で～と考える」などの根拠を明らかにする語彙や、「～に対して」「～と比べると」「一方、～は」「○○は○よりも」などの比較して考える時に使うつなぐ語彙を児童の発言に見出すことができた。今後は、両者を比較する上でのつなぎ言葉、判断語彙を育てていくこともPISA型読解力を向上させる上で必要なことと考える。

さらに、授業を通して、児童のつまずきのタイプが明確になってきた。それらは、次のように分類できる。

- ①新聞記事の内容を理解することが苦手な児童
- ②ある観点について表層的な判断にとどまっている児童
- ③観点と観点をうまくつなげて総合して判断するのが苦手な児童

①の内容理解が苦手な児童にとって学習材である一般紙の新聞記事は語句が難しく、熟考・評価の論拠が確立しにくかったと思われる。子ども向けに書かれた新聞を用いるなど、より理解しやすくするための手だてが考えられる。

②③の児童については、新聞作りへと発展させる方策が考えられる。内容とリード文、内容と見出しなどの関連を考えながら、自分の伝えたいこと新聞記事に書く活動を通して、総合的に考える力が育つものと考えられる。

(付記)

資料1から資料4は個人情報に配慮し仮名としているが、授業では、実名が記された新聞記事を用い、それにルビを付し学習材として用いた。

註

- 1) 国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能』2004.12.25 pp.16-17
- 2) 日本新聞教育文化財団NIE委員会『NIEガイドブック小学校編』1999.3.

二つの記事比べてみましょう。

六年 名前 ()

キャプション	写真	リード文	見出し
<p>A「刈り取りを行う児童」 B「収穫する児童」 A「山添村 広代」 B「山添村 広代」</p>	<p>どちらも稲刈りをしていているところを写している。</p>	<p>A「校長」 B「校長」 A「六年生十八人」 B「六年生十六人」 A「刈り取り」 B「刈り取り」 A「山添村春日村立やまぞえ小学校」 B「山添村立やまぞえ小学校」 A「原爆投下直後の長崎市で見つかった稲の子孫」 B「長崎で被爆した稲の子孫 原爆稲の稲刈りをした」</p>	<p>似ているところ</p> <p>A「長崎で被爆した稲の子孫を栽培」 B「長崎で被爆した子孫「原爆稲収穫」」 A「稲刈りで原爆の怖さ実感」 B「戦争怖い」 A「もみの半分はからっぽ、未成熟」 B「もみの半数、中身が空や黒く変色」</p>
<p>A「被爆した稲の子孫」 B「やまぞえ小近く」 A「水田」 B「水田」</p> <p>B「実った原爆稲」</p>	<p>写っている人が違う。</p>	<p>A「稲には六十年前の被爆の影 郷音がまだ残っている、半分ほどしか実をつけず、児童は普通の稲との違いに驚いていた」</p> <p>A「平和学習」 B「児童グループ」 A「同校近くの水田」</p>	<p>違うところ</p> <p>A「60年前の影郷音に敬意」 B「ゴシヒカリと食べ比べ」 B「生命力すごい」</p>

新聞の特徴や、自分で体験したことをつまえて、選んだ根拠を書きましょう。

本文	キャプション	写真	リード文	見出し
Aの新聞	Bの新聞	Bの新聞	Aの新聞	Aの新聞
<p>Aの新聞には最初「原爆船」のルーツがあつて、どうやって「原爆船」を植えることができたということが伝わってくる。また、平和学習で「戦争体験者の話を聞いたり……」など原爆船以外にも力を入れているということがよく分かるから。</p>	<p>Aの新聞は、「山添村広代」と刈り取りをした場所が簡単に書いてあるけれど、Bの新聞は「山添村の広代のやまぞえ小近くの水田」と地域のことができるだけ詳しく書いてあって、山添村の広代のどこかということが伝えられるから。</p> <p>「原爆船」という専門的な言葉が入っているから。</p>	<p>Aの新聞の写真は二人しか写っていないが、刈り取りの様子がよく分らないけれど、それに對してBの新聞の写真は二人以上が写っているし、かまを持っていてるので、船を刈っている様子が分かるから。</p> <p>（みんなできていてということが良く分かる。）</p>	<p>Aの新聞とBの新聞とを比べるとAの新聞の方がくわしく書いてあり、「平和学習」という言葉があるから。（原爆船以外の学習もしている）</p> <p>たということがわかるから）</p> <p>（原爆を受けた船のことなど）</p> <p>船<small>いんぼ</small>が分<small>わか</small>る。</p>	<p>Bの新聞で「ゴシヒカリと食べ比べ」という間違つた見出しがあるから。読んでいる人に間違つた情報を伝えることになるので。</p>

原爆投下直後の長崎市で見つけた稲の子孫の栽培を通じて平和学習に取り組んできた山添村春日、村立やまぞえ小学校（Y 校長）の六年

長崎で爆した稲の子孫を栽培

山添の小学校

生十八人が四月、同校近くの水田で、稲穂の刈り取り作業を行った。稲には六十年前の被爆の影響がまだ残っていて、半分ほどしか実をつけず、児童は普通の稲との違いに驚いていた。



もみの半分は空っぽ、未成熟

60年前の影響に驚き



被爆した稲の子孫の刈り取りを行う児童
= 4日、山添村広代

被爆した稲の存在を昨年夏に新聞報道で知った同村広代、K さん（さん）が、その種もみを九州から五月、K さんの田約五十

取り寄せて、同校児童の戦後六十周年の体験学習のため提供した。児童はこまを手に田へ。被爆した稲の子孫は普通のものとは

稲刈りで原爆の怖さ実感

べると、茎が太く、稲穂も二十センチほど長い。一見すると、たわわに実っているようだが、もみの半分は空だった。未成熟だった。

I さんは「六十年前の原爆で生き残った稲を植えたのは、いい体験」と話し「普通の稲より時期的に遅く刈り取っているのに、まだ熟していないし、もみの中にお米がないもの

「多い」と驚いた様子だった。同校は、被爆した稲の栽培と並行して、地域の戦争体験者の話を聞いたり、こ

とし五月には広島県へ修学旅行を行うなど平和学習に取り組んでいる。

児童の刈り取り作業を見守っていた K さんは「六十年たっても、まだ放射能の影響が残っている。原爆

の怖さを知ってもらうには一番の勉強になったので話していた。

A 新聞

長崎で被爆した子孫「原爆稲」収穫

「戦争怖い」「生命カすぞい」

やまぞえ小6年生



実った原爆稲を収穫する児童ら
＝山添村広代のやまぞえ小近くの水田で

コシヒカリと食べ比べ

同村広代に水田10畝を借り、原爆稲を育て、実の育った。しかし稲穂はもみぢか。コシヒカリは既に育ち、実の大きさが半分ほどあり、収穫量が少なかった。コシヒカリは既に育ち、実の大きさが半分ほどあり、収穫量が少なかった。

さん(1)は「80年前から受け継がれている生命カすぞい」と話した。後日食べ比べて、11月5日に学習発表会を開く。原爆稲は、長崎市の浦上天主堂近くの水田で採り、取られ、文部省(当時)の原爆調査団に参加した九州大学農学部が保存してきた種もみの子孫。突然、異なるため、収穫量が少ない。同小はNPO「九州アジア記者クラブ」が栽培して採取した種もみを譲り受けた。

山添村立やまぞえ小(やまぞえ小)の校長、児童111人の6年生16人が4日、長崎で被爆した稲の子孫「原爆稲」の稲刈りをした。

